

ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力に及ぼす影響 —東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加して—

水落洋志・尾上明子
菊地伸二・高瀬慎二
中村雅・加藤実治

I. 緒言

自己教育力とは、北尾(1990)によると、「人間が本来的に学ぶ存在であるという認識に立つ幅広い概念」と定義しており、これは、人が自ら主体的に学ぶ意志、態度、能力として捉えられている。これまで、自己教育力に関する研究は多々存在する。例えば、自己教育力を回想的に測定する尺度の開発に関する研究(兼重、1991)や自己教育力に関係する変数として、両親の育成態度(篠原、1996)学習目標(前原、1993)、経験(小山ら、1994)が取り上げられてきた。また、自己教育力とレジリエンスの関係を検討した研究では、自己教育力得点とレジリエンス得点は正の相関関係にあることを明らかにしており、自己教育力は、生きる力の重要な構成要素であることを示唆している(森ら、2001)。これらのことから、自己教育力の獲得および育成することは、教育界にとって大変重要な課題であると考えられる。特に、子どもたちの発達段階から、乳幼児に関わりが深い保育者を目指す学生の自己教育力の育成が急務であると思われる(長谷部、2010)。しかしながら、保育者を対象とした実証的研究はほとんどないのが現状である(e.g.、西浦ら、2005;長谷部、2009)。例えば、西浦ら(2005)は、保育者養成における自己教育力について検討している。その結果、入学時に自己教育力の低い学生は1年間でより低くなることを報告している。さらに、長谷部(2009)によると、保育者を目指す学生は、自己実現得点は高いが、課題意識や自主性が低いことを明らかにしている。これらのことから、保育者を目指す学生の自己教育力に関する研究は、実態調査をおもに行われてきているが、どのような方略をとることで、保育者を目指す学生の自己教育力が向上するかに関しては検討されていない。この点に関し

て、専門職を目指す学生ではないが、大学生を対象にボランティア活動が自主的な活動や学習に与える影響を検討した研究(森ら、2001)がある。この研究では、ボランティア活動を行うことで、自己実現の意識だけでなく、指導性などの得点が向上したことが報告されている。よって、ボランティア活動は、自己を高める効果があり、自己教育力にも影響を与える可能性があると思われる。

そこで、本研究は、ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力におよぼす影響を明らかにすることを目的とした。ボランティア活動として、本学が、2011年から行っている東日本大震災復興ボランティアを取り上げた。この活動は、日本聖公会東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こうプロジェクト」の協力体制のもと行われており、本学、キリスト教センターが中心となって行っているボランティア活動である。目的を明らかにするために、本研究では、ボランティア活動の前後で参加学生に対し、森ら(2001)が作成した自己教育力尺度を参考に測定を行った。

調査の方法についてみる前に、本学がこれまでに行ってきたボランティア活動及びその基礎にある精神について触れることにする。

II. 歴史的見地から見た本学のボランティア活動

(1) 濃尾大地震と日本聖公会、及び、本学創設者ヤング先生

本学の歴史を紐解くとそれは日本聖公会中部教区史の中で語ることが最も相応しい。中部教区は、今年で教区成立100周年を迎え記念行事が持たれるが、そもそも、教区の宣教は、明治8年、ファイソン師が新潟に伝道を開始したことから始まる。少し間を置き、明治21年、J. C. ロビンソン

師（以下、ロビンソン師）が、カナダ・トロントのウィクリフ神学校の伝道協会の後ろ盾により来日する。ロビンソン師は、ショー師（明治6年来日）の導きにより、この中部地区、名古屋で伝道を始める。ロビンソン師が来日して3年後の明治24年10月28日、午前6時38分50秒、突如として大地震が起きた。震源地は、岐阜県大野村根尾村付近。後に、濃尾大地震と呼ばれる地震である。この地震は、過去60年間における地震の最大規模であり、マグニチュード8.4であった。岐阜地方は、余震が10年間も続いたという。この地震により、住む場所のない多くの人々、孤児となった子どもたちが路頭に迷った。その頃、岐阜中学校で英語教師として赴任していたA. F. チャペル氏や森巻耳氏は、この惨状を見るに忍びなく、内外からの寄付金、特に匿名の英国婦人の多額の寄付金がチャペル氏のもとに寄せられたことにより、罹災した視覚障害者の救済事業として土地と家屋を買い入れ鍼灸伝習所を設立した。この後、視覚障害者のための教育を始めることになり、明治27年、岐阜聖公会訓盲院が誕生した。ロビンソン師も内外からの支援金で、名古屋市代官町に幼老院（幼い子どもと老人のためのホーム）を設立。師は、本国カナダに力強い支援要請をしている。言い伝えによると、本学創設者ヤング先生は、この要請に応じて来日したと言われている（明治28年）。従って、直接的な支援はすでに終わっていたであろうが、この地震を契機に来日されたということになる。この頃を契機として、日本におけるキリスト者の社会福祉運動が各地で盛んに行なわれるようになった。本学創設者、ヤング先生の生きる姿勢は、日本に来た多くの宣教師のそれと共通するものであり、その後も、本学に引き継がれていく機軸となる姿勢である。

（2）伊勢湾台風

1959（昭和34）年9月26日夜、猛烈な台風が伊勢湾岸地方を襲った。伊勢湾台風である。名古屋地方では、満潮時と台風通過が重なり、同日午後9時の最高潮位は、5.81メートル、瞬間最大風速は、45.7メートルを記録した。高潮は一瞬にして4.5メートルの堤防を破壊し、地下水汲み上げによる地盤沈下の海拔ゼロメートル地帯に侵入、和

歌山県、三重県、愛知県、奈良県、岐阜県の日本アルプスを中心に多くの犠牲者を出した（犠牲者5098人、負傷者38,921人）。明治維新後の最大級の自然災害の一つである。

日本聖公会中部教区は、10月2日に、教区事務所相沢誠四郎司祭、木島徳治司祭、矢沢信夫司祭及びミス・ハロビン（本学学長のホーキンス先生は、休暇帰国中）が、集まり「風水害救済対策委員会」を結成し、事務局を学生センターに設置した。詳細は省くが、柳城の学生たちは、南区白水地区で臨時保育園を開設し奉仕をした。また、附属の先生方も市内の避難所で保育した。この時の様子は、一冊のファイルにまとめられている。学生であった久保田了子（「柳城学院百年史」）の思い出には、翌朝にはすぐトラックに乗って臨時託児所に向かい、泥や流木の横たわる中、復興作業をする方々のお子さんを預かり、抱きかかえ、背負っての活躍をした。当時の坂東先生が、少し落ち着いた頃「あなたたちは、実に良い体験をされたのですよ。幼稚園の先生と看護婦さんは、汚いお仕事に慣れなければ駄目です」と言われたことを印象深く覚えていると言う。臨時託児所の前での明るい笑顔の柳城生の写真などが残されている。全国からの支援で学生の活躍は顕著であり、このようなボランティア活動の結果、翌年、名古屋キリスト教社会館が建設され、その働きが広がり今日も貴重な働きが続けられている。

（3）阪神・淡路大震災

1995年1月17日、午前5時46分に、阪神間を襲った大地震は、まだ記憶に新しいところである。地震が起きることが全く予想されていなかった阪神地区に早朝起きた地震の被害は、テレビを通して連日報道され、目を疑うような光景が映像として飛び込み、全国の人々が支援のため駆けつけた。マグニチュード7（死者6000人以上、負傷者4万人以上）。柳城の学生も当初から何かお手伝いをしたいと声を挙げていたが、地震発生後の約1ヶ月後、学生たちの声を受け入れた当時の小林学長が決断し、ボランティアとして送り出すこととなった。日本聖公会大阪教区が対策本部となっていたため、そこを通し、関連施設「博愛社」（養護施設）に宿泊しながら、2月23日～3月27

日まで2泊3日(中にはそれ以上、宿泊する学生、再度足を運ぶ学生もいた)、人数にして計65名が順次阪神の地に足を運んだ。被災者の方々の自立のための支援ということで、「北青木老人いこいの家」での清掃、東灘小学校避難所での配給活動は、全体を通して継続して行なわれたが、芦屋・東灘地区の方々の必要なものを尋ねて廻ったり、障害を持つ人の入浴介護の手伝い、子どもたちとの交わりの時を持つなど、その時々ニーズに応じての活動であった。柳城が長期に渡り活動した裏には、「引継ぎノート」が存在した。グループからグループへと引き継がれ、自分たちに一体何ができるかという学生たちの自問や悩みが綴られている。このような活動により、学生たちは、机上で学ぶことのできない多くのものを得たに違いない。

(4) 東日本大震災第1次、第2次ボランティア

2011年3月11日、東北地方を襲った未曾有の震災、地震、津波、原発事故は、現在もその余りの影響の大きさのため、復興の見通しも立てられない状態が続いている(マグニチュード9、震度宮城県栗原市で震度7。周辺は、震度6強。死者15869人、行方不明2847人)。日本周辺における観測史上最大の地震であると言われている。日本聖公会は、復興のためすぐに援助の体制を整えることに着手し、東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう!プロジェクト」を立ち上げた。本学も、2011年度より始動したキリスト教センターの働きとして、学生とともに「私たちに何ができるのか」について考え、支援物資の募集、絵本・本学紙芝居プロジェクトの取り組みである手作り紙芝居作品の寄贈など出来ることから活動した。現地でのボランティア活動への参加要望は当初からあったが、原発事故の影響も不明であったため、見合わせていた。しかし同年7月になり、本学理事会は、「いっしょに歩こう!プロジェクト」のもとでの活動をするに関してキリスト教センター(宗教委員会)に打診したため、直ちに応じることになった。募集をして1日半で人数を上回る学生が応じるという関心の高さを示した。最終的には、学生18名、スタッフ6名(下原チャブレン(現在、上田聖ミカエル及諸天使教会牧師)、尾

上、菊地、柴田の各教員、及び松本氏、野村司祭)の総勢23名により、2011年9月1日(木)~4日(日)、2グループに分かれての活動を行なった。ボランティア活動の大きな目的は、被災地に立つこと(自身の眼で現実を見る、現状を知る)と子どもたちとの交流であった。2011年の創立記念礼拝第2部でこの活動の継続を願い、学生たちによる報告会を行ない、その願いが今年へと繋がった。この活動の記録は、2012年3月、小冊子に、写真、活動内容概要、学生の感想を中心にまとめ発行した。

第2回は、2012年8月30日(木)~9月2日(日)まで、学生13名、スタッフ5名(下原元チャブレン、尾上、菊地、高瀬、水落の各教員)で行なった。第2回目となるボランティア活動も、学生たちの関心は高く、すぐに定員をオーバーする状況であった。今回も聖公会のプロジェクトとの連携はもちろん、訪問先との直接交渉により準備を重ねた。第1回目と同じ訪問箇所は1箇所のみで新しく繋がりを持つことが出来たことは、活動をより広げる結果となった。また、第2回目も学生による報告会や報告書の発行、また、新たに教員による教職員への報告会なども予定している。第1回、2回を通し、参加した者に共通する気持ちは、これらの体験を「分かち合いたい」というものである。東日本大震災の復興の見通しは、遅々としてつかない状況であるが、人間として、同胞としてこの震災被害者の苦しみ・悲しみを覚え続けること、特に幼児教育の基本的かつ最も重要な課題である「いのちを守る」というその重さを体験された現場の保育者から学ぶことは大きいと感じた。今後も、本学がなんらかのかたちでかわり続けることができたならと願うものである。

そこで次に、調査の方法についてみることにする。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象

愛知県名古屋市にある名古屋柳城短期大学保育科に在籍する学生11名(1年生:9名、2年生:2名)を対象に行った。

2. 調査時期

ボランティア活動の日程が2012年8月30日から9月2日までであるため、事前調査として、2012年8月30日に、事後調査として9月2日に実施した。

3. 調査方法

集団法により質問紙調査を実施した。ボランティア参加学生に対して、調査者により調査の意図を説明した後、調査票を配布した。質問紙に回答を記入直後ただちに回収する方法をとった。なお、分析は統計処理されるため個人の特定はされないことについて、口頭で説明し調査協力を依頼した。

4. 調査内容

自己教育力尺度（森ら、2001）を用いて質問紙調査を実施した。自己教育力尺度とは、自己教育力に関する7つの特性（1：課題意識、2：主体的思考、3：学習の仕方、4：自己評価、5：計画性、6：自主性、7：自己実現）それぞれ5項目ずつ、計35の質問項目について、「はい・いいえ」の2件法で回答する尺度である。

5. 分析方法

2件法によって回答された結果を「はい」に1

点、「いいえ」に0点を配し数量化した。その結果をもとに、ボランティア参加前と参加後の比較を行うため、ボランティア参加前後における各項目でt検定を行った。

IV. 結果および考察

本研究は、ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力におよぼす影響を明らかにすることを目的としていた。この目的を達成するためにボランティア参加前後における各項目でt検定を行った結果、課題意識得点 ($t(9)=4.38, p<.05$)、主体的思考得点 ($t(9)=2.75, p<.05$)、自己評価得点 ($t(9)=3.14, p<.05$) が有意に向上したことが明らかになった(図1)。しかしながら、他の項目得点における有意な差は認められなかった。

ボランティア活動参加前後で、課題意識得点、主体的思考得点、自己評価得点が向上した理由として、自己学習システムが関与していると考えられる。このことに関して、石田（1990）は、自己教育力を自己学習力として捉え、以下のように説明している。自己学習を促すためには、「目標設定、”学習行動の自己観察、内的な自己評価、自己強化を含む表出的な反応を行う」といったサイクルで成り立つ。具体的には、学習課題に対する自己の目標を明確にし、その目標に向かって学習

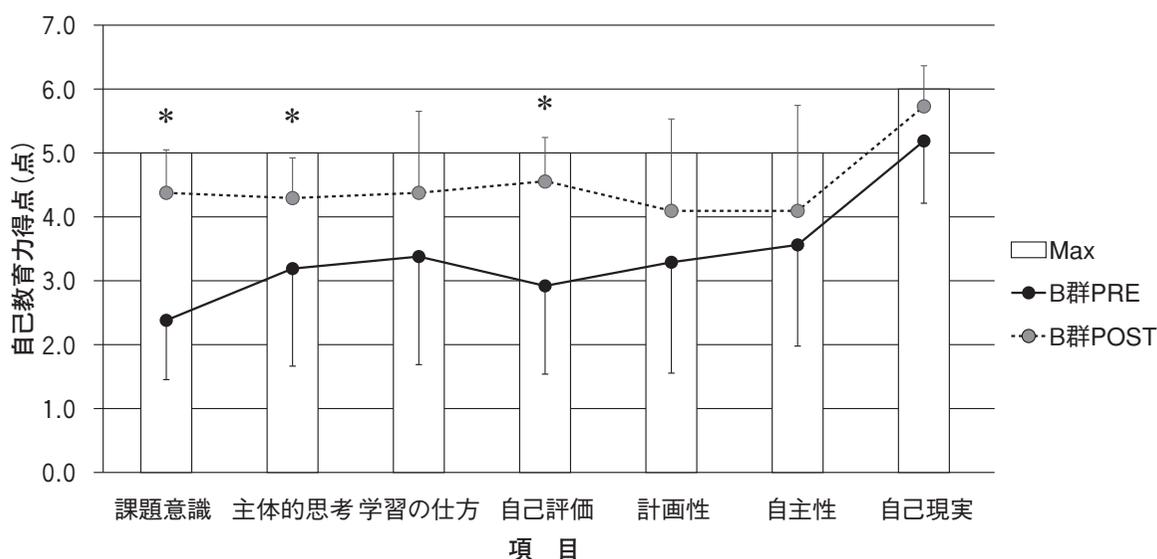


図1. ボランティア活動前後の自己教育力得点の変化

を開始する。解決時には自己の行動の適切さや状態を自己観察し、その結果、表出的な反応を行うとしている。よって、ボランティア活動に参加する中で、明確な目標を持つことができ、その目標に対して到達したことが、自己評価の向上に繋がったと考えられる。

一方、学習の仕方得点、計画性得点、自主性得点、自己実現得点に関して有意な差が認められなかった。このことに関して、自己学習システムは、適切な判断基準を内在化しなければならず、個人の中だけで完結したフィードバックシステムのみで終わってしまえば、適切な学習行動を生み出すことができないことを報告している(石田、1990)。また、河崎(2011)によると、ボランティア活動には3つのレベルがあり、基盤レベル、経験レベル、結合レベルが存在する。このことから、自己教育力を身につける上で、ボランティア活動は、客観的にも自己学習が適切であったかを見極める力と豊かな経験が重要であるといえる。よって、本研究において、学習の仕方得点、計画性得点、自主性得点、自己実現得点に差異が認められなかったことは、学生が自己教育力を獲得する過程段階にあったためと思われる。

以上のことから、ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力の一部に内在的な学習効果を促進させたといえる。しかしながら、今回、調査した学生は、自主的にボランティア活動に参加した学生であるため、今後は、自主性が測定段階から低い学生やボランティア活動に参加していない学生との比較を行うことが必要である。また、継続的な活動を遂行することで、より一層、自己教育力が構築されると考えられる。

V. 結言にかえて

ボランティア活動に参加すると人は成長し変わるとよく言われるし、実際に私たちも今回の活動でそのことを感じてはいたが、今回の方法によって、自己教育力という視点から、ある程度、目に見えるような形で裏付けることができたことにはある種の満足を覚えている。

ただ、今回のボランティア活動において、学生たちが一体どのような出会いを通して、そのような成果が得られたか、ということについては必ず

しも十分に検討されているわけではなかった。

私たちが被災地に実際に足を運びその光景を目の当たりにしたこと、そこに住む人びとと出会い、たとえわずかな日数であったとしても言葉を交わしたこと、そこにいる子どもたちと遊び、その言葉に耳を傾けたこと等々、こうしたことは、一つ一つとても重要な出来事であり、おそらくはそのような体験の総体が、先のような成果につながっていたことは間違いのないであろう。しかしながら、そのような一つ一つの出来事をそれ自体として扱うことはしなかった。

また、本学のボランティア活動、あるいはそれを支える精神について考えるとき、自分たちが何から学ぶことができるか、あるいは、自分たちが学びうる大切なことがらを知る、ということはとても重要な意味を持っていると思われる。創設者のヤング先生にとっても、はるか離れた日本の地の濃尾大地震という出来事が一つの来日の契機となっているとすれば、ヤング先生はその出来事やそこで生きる人びとのなかに自分が向かうべき大切な何かがあることを感じ取っていたと推測することも可能である。

そのような信念に支えられてこそ、人間はその場から多くのことを学ぶことも可能になるのであり、その意味では、時代や状況もさまざまに異なるとはいえ、今回のボランティア活動の呼びかけに回答して参加した学生たち一人ひとりが出発前から自分にとって被災地に行くことに意味があるという思いに多かれ少なかれ駆られていたということも決して見過ごすことのできないこととして覚えておきたい。

VI. 引用・参考文献

- 1) 北尾倫彦 「学校における実践的研究から (自己教育力の育成・再考)」 教育心理学年報 29 1990
- 2) 兼重宗和 自己教育力について 徳山大学論叢 35 1991
- 3) 篠原弘章、井上大介 両親の養育態度が児童の自己教育力におよぼす影響について：とくに友人やきょうだいの賞賛・叱責場面について 熊本大学教育学部紀要 人文科学 40 1991

- 4) 前原武子 児童の自己教育力におよぼす学業達成目標の効果 琉球大学教育学部紀要 第1部・第2部 42 1993
- 5) 小山悦司、河野昌晴、赤木恒雄 教師の自己教育力に関する研究：第4次調査結果の分析を中心に 岡山理科大学紀要 B 人文・社会科学 29 1994
- 6) 森敏昭、石田潤、清水益治、富永美穂子、Hiew、Chok C 大学生の自己教育力に関する研究 (10)：レジリエンス尺度の開発 日本心理学会大会発表論文集 Vol. 65 2001
- 7) 長谷部比呂美 短期大学生の自己教育力に関する検討 (2)：保育学生の自己教育力の推移 淑徳短期大学研究紀要 49 2010
- 8) 西浦和樹、松原勝敏、中村多見 保育者養成における社会的スキル及び自己教育力の育成に関する教育心理学研究 宮城学院女子大学発達科学研究 5 2005
- 9) 石田勢津子 「学校における実践的研究から(自己教育力の育成・再考)」 教育心理学年報 29 1990
- 10) 河崎智恵、岩本廣美、中川元庸 教員養成大学におけるボランティアを核としたキャリア教育の実践 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」 Vol. 3 p. 21-28 2011

自己教育力に関するアンケート

ボランティア活動に参加する学生を対象に、アンケートを実施し、調査させていただきたいと思います。お忙しい中、申し訳ありませんが、以下の質問にご回答いただき、ご協力お願いいたします。

なお、回答は無記入とし、得られた資料も統計的に処理しますので、個人のプライバシーが公表されることは一切ありません。安心して、ご自分の思う通りに率直にお書きください。

「はい」か「いいえ」に○を付けてください。

1. 授業が始まった時、「よし、勉強しよう」という気持ちになりますか	はい・いいえ
2. 学校(大学)の勉強のほかに、やってみたい勉強がありますか	はい・いいえ
3. 授業の中でわからないことがあれば、後で勉強し直しますか	はい・いいえ
4. 授業中におもしろい話を聞くと、後で調べてみようと思いますか	はい・いいえ
5. 学習課題が与えられても、家で何を勉強すればよいか、自分で決めることはできますか	はい・いいえ
6. 決められた勉強は、最後までやりとげなければ気がすまないほうですか	はい・いいえ
7. 人のまねをするよりも、自分で工夫するほうが得意ですか	はい・いいえ
8. 本を読んで、自分でいろいろなことを考えるのが好きですか	はい・いいえ
9. 先生の話の中に、わからないことがあれば、質問しますか	はい・いいえ
10. 不思議なことや珍しいことがあれば、自分からすすんで調べようとしますか	はい・いいえ
11. 人に教えてもらうよりも、自分一人で考えるほうが好きですか	はい・いいえ
12. 新聞やテレビのニュースを見て、世の中のことをいろいろと考えるのが好きですか	はい・いいえ
13. 本を読む時、大切なところは線を引いたり書き出したりしていますか	はい・いいえ
14. 勉強する時、大事なことを図や表にまとめることがよくありますか	はい・いいえ
15. ひとりで勉強している時に、わからないことがあれば、参考書や事典などで調べますか	はい・いいえ
16. 授業中、先生の話や仲間の発表をよく聞いていますか	はい・いいえ
17. 授業でわからないことがあった時、友達に聞いたり、友達と教え合ったりしますか	はい・いいえ
18. 復習をしていますか	はい・いいえ
19. 試験で問題を解いた後で、間違いがないかどうかを点検していますか	はい・いいえ
20. 授業の後で、よくわかったかどうかを反省していますか	はい・いいえ
21. 試験の成績が悪かった時、どこがわかっていなかったか、反省しますか	はい・いいえ
22. 自分の勉強のしかたが良いか悪いかを、考えてみるがありますか	はい・いいえ
23. 何かの失敗をした時、努力が足りなかったと思いますか	はい・いいえ
24. 自分のよいところをみつけて、それを伸ばすようにしていますか	はい・いいえ
25. 休みの日には一日の予定を立てて行動しますか	はい・いいえ
26. 勉強や仕事をする時、よく考えてからとりかかるほうですか	はい・いいえ
27. 前の日に翌日の時間割を確認しますか	はい・いいえ

※裏面に続く

ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力に及ぼす影響

28. 計画を立てるのは、好きなほうですか	はい・いいえ
29. 作文などを書く時、はじめによく考えてから書き始めますか	はい・いいえ
30. 勉強の計画を立てる時、実行できるかどうかをよく考えていますか	はい・いいえ
31. 授業中に、自分からすすんで意見を発表するほうですか	はい・いいえ
32. 人のやりたがらないことでも、よいと思ったことは、すすんでやるほうですか	はい・いいえ
33. グループ学習で話し合いをする時、自分の意見を出しますか	はい・いいえ
34. 何事にも先頭に立って活動するほうですか	はい・いいえ
35. 人から頼まれなくても、進んで手伝うことがありますか	はい・いいえ
36. 何か困ったことがある時に、なるべく人にたよらないで、自分で解決するようにしていますか	はい・いいえ
37. 自分の得意なものをもっと伸ばしたいと思いますか	はい・いいえ
38. 人々の役に立つ人間になりたいと思いますか	はい・いいえ
39. 人から好かれる人間になるように努力していますか	はい・いいえ
40. 将来のことを考えて、「よし、頑張ろう」という気持ちになりますか	はい・いいえ
41. 難しいことに出会っても、乗り越える自信がありますか	はい・いいえ
42. 自分の不得意なところを改善しようと、努力していますか	はい・いいえ

自己教育力に関する説明

○7つの特性：「課題意識：質問1－6」、「主体的思考：質問7－12」、「学習の仕方：質問13－18」、「自己評価：質問19－24」、「計画性：質問25－30」、「自主性：質問31－36」、「自己実現：質問37－42」

○黄色の個所は、年代によって抜く質問であり、実際に短大生をターゲットにした研究では、抜かれているものが多い。よって、大学生を対象にする場合には、抜いてもよいと思われる。しかし、先行研究とは異なり、自分の聞きたいことだけ聞いてしまうと、結果に偏りがでるので、他の質問項目に関して抜かないこと。

○分析方法

「はい」が1点、「いいえ」が0点に換算して、それぞれの項目に関する平均得点と標準偏差を算出する。統計のかけ方は様々であるので、自分の意図に合うものを選ぶ。

Impact on the self-directed learning student volunteer activities aim to child-care worker —To participate in volunteer activities supporting the Great East Japan Earthquake Reconstruction—

Mizuochi, Hiroshi*

Onoe, Akiko*

Kikuchi, Shinji*

Takase, Shinji*

Nakamura, Tadashi*

Kato, Miharuru*

本研究の目的は、ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力におよぼす影響を明らかにすることを目的とした。この目的を達成するために、ボランティア前後で自己教育力尺度を用いて測定した。その結果、課題意識得点、主体的思考得点、自己評価得点が有意にボランティア前より向上したが、学習の仕方得点、計画性得点、自主性得点、自己実現得点に関しては、有意な差異は認められなかった。このことから、ボランティア活動に参加することで、内在的な学習効果を促進させたことが示唆された。しかし、短期間のボランティア活動であったため、今後、継続的なボランティア活動を遂行することでの影響を検討する必要性がある。

キーワード：保育者養成, 自己教育力, ボランティア活動

Keywords : School of professional development in Child-care worker, Self-directed learning, Volunteer